

腺腫の癌化か de novo 発生か

Adenoma-carcinoma Sequence or “De Novo” Carcinogenesis?: *Bedenne L, et al* (Cancer 69: 883-888, 1992)

大腸癌の発生において腺腫の癌化と de novo 発生のどちらが相対的に重要かは現在でも論争のあるところである。著者らは 1,630 例の大腸癌の切除例で、癌組織周囲の腺腫遺残の出現率について、腫瘍の肉眼的形態、深達度、大きさ、位置の面から検討した。

浸潤型および潰瘍浸潤型の腫瘍はすべての大腸癌の 39.8%あるにもか

かわらず、腺腫性遺残の出現率は 0.5%しかなかったが、隆起型の腫瘍ではその出現率は 25.8%であった ($p < 0.001$)。

更に隆起型で m および sm にとどまる 2 cm 以下の大腸癌では、腺腫性遺残の出現率は 83%と高値であった。

また、右半結腸癌では左半結腸癌および直腸癌よりも一貫して腺腫性遺残の出現率が低かった。

これらの結果は大腸癌の発生には大きく 2 つのタイプがあることを示唆している。1 つは de novo 発生して潰瘍浸潤型や浸潤型へと進展していくタイプであり、もう 1 つは

adenoma-cancer sequence をたどり、隆起型へと進展するタイプである。

〔訳者コメント〕 著者らは潰瘍浸潤型および浸潤型の大腸癌に腺腫性遺残の発生率が低いことによって、それらが de novo 発生すると考察しているが、これらの型には m, sm の症例が含まれておらず、早期の段階で本当に腺腫性遺残のない de novo 発生だったかは定かではない。いわゆる平坦・陥凹型早期大腸癌を含めた検討が望まれる。

(愛知県がんセンター消化器内科

高木 篤 抄)